

韓国仏教学結集大会参加・仏教遺跡研修報告

寺 尾 英 智

平成十八年四月二十二日(土)、二十三日(日)の両日、韓国慶尚北道海印寺(ヘインサ)を会場に、韓国仏教学結集大会第三回大会が開催された。この学会は、韓国の国内はもとより日本・中国・台湾など東アジアをはじめ韓国国外の仏教研究者の参加も多い国際学会として、二年に一度開催されている。今回、身延山大学より長澤市郎、福土慈稔、望月海慧、三輪是法の諸氏と共に研究発表の機会を得ることができた。

会場となった海印寺は仏教関係者には周知のように、世界遺産にも登録された高麗大藏經の版木を伝える名刹である。また、所在する慶尚北道には、日本の飛鳥・奈良にも劣らない慶州(キョンジュ)があり、日本の古代

仏教を考える上で見逃すことができない寺院・遺跡の宝庫である。そこで、学会への参加と併せて、長澤・福土・望月の諸氏と共に、慶州の寺院・遺跡を訪れることにした。

四月二十日 成田空港に集合し、午後一時五十分発の大韓航空七一一便にて韓国第二の都市釜山(プサン)へ向かう。郊外の金海国際空港へ降り立ったのは、午後四時過ぎのことである。空港で望月氏手配のレンタカーに乗り、高速道路を慶州へと向かう。車窓からは、釜山郊外の山際に高層アパート(日本でいうところの高級マンション)が、まさに林立している様が目に入る(写真1)。

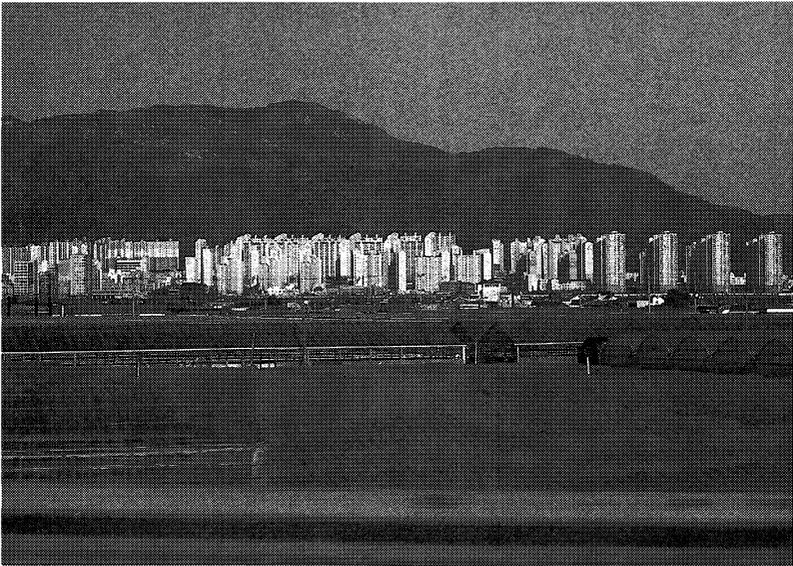


写真1

ジブリのアニメのシーンだったろうか、どこか見覚えのある景色に、現在の韓国経済の勢いを垣間見たような気がした。

梁山の通度寺（トンドサ）は、慶州への途中にある。

午後五時過ぎの到着であったため、観光客の拝観時間は終了していたが、入り口の警備員に呼び止められ、地元
の信者と交じって参拝することができた。この寺は、釈
尊が法華経を説かれたインドの靈鷲山を山号とし、善徳
女王末年（六四六）に創建された。慈蔵が唐から持ち帰っ
た釈尊の真身舍利と袈裟を安置する金剛戒壇（写真2）
があることから、戒律根本道場の仏宝寺刹であると位置
付けられている。夕方の勤行がはじまる時間であったた
め、梵鐘閣における勤行前の太鼓と梵鐘の連打、それは
十名ほどの修行僧が数分ごとに交代していく演奏とでも
いうべきもの、を見ることもできた。慶州に到着したの
は、暗くなつてからのことである。



写真 2

四月二十一日 この日は、慶州の遺跡・寺院を精力的に見学して回った。現地の寺院・遺跡に精通した福士氏と、望月氏の車という組み合わせがあればこそこの日程である。これに、やはり現地に詳しい長澤氏の古代比較文化史というべき解説が加わり、最強の巡検となった。

まず新羅歴史科学館で模型による事前学習を行い、世界遺産に登録される石窟庵（ソックラム）に向かった。新羅仏教美術の最高峰といわれる石造如来像は、ガラス越しの拝観であった。次に向かったのは、やはり世界遺産に登録される仏国寺（ブルグクサ）である。景德王十年（七五一）の創建であると伝えられる。統一新羅時代に建立された釈迦塔と多宝塔の二つの石塔が大雄殿の前に並ぶが、様式は全く異なっている。大雄殿に向かって左手は釈迦塔、右手は多宝塔であるから、二仏並座の配置である。伽藍は階段状に分かれた境内に配置されており、石築地上の回廊部分が印象深い。世界遺産の二カ所共に学校の生徒や観光客で、大変な賑わいであった。

仏国寺から、慶州市内の南側に位置する南山（ナムサン）にむかう。日本にも四天王寺があるが、慶州の四天王寺（サチョンワンサ）は遺跡である。同寺は南山の手前に位置し、文武王十九年（六七九）に創建された。なだらかな丘陵状の草原の中に、伽藍の礎石が顔をのぞかせている（写真3）。周囲には畑もある。福士氏が以前に訪れた時は、藪が生い茂り見学するにも一苦勞であったとのこと。近々発掘調査がはじまるようで、周囲に柵を設置する作業が行われていた。発掘前の状況を見ることができたことは、幸いであった。

南山は石仏群の宝庫で、主要なものを見て回るためには、本格的なハイキングが必要であるという。その中で、細い山道であったが、乗用車で比較的近くまで行くことができる塔谷磨崖彫像群を見ることができた。この場所は新羅時代の神印寺址（シンンサジ）で、三重石塔があり、高さ一〇メートル、幅三〇メートルの岩とその周辺にある岩に、合計三十四点の諸像が刻まれている（写真4）。

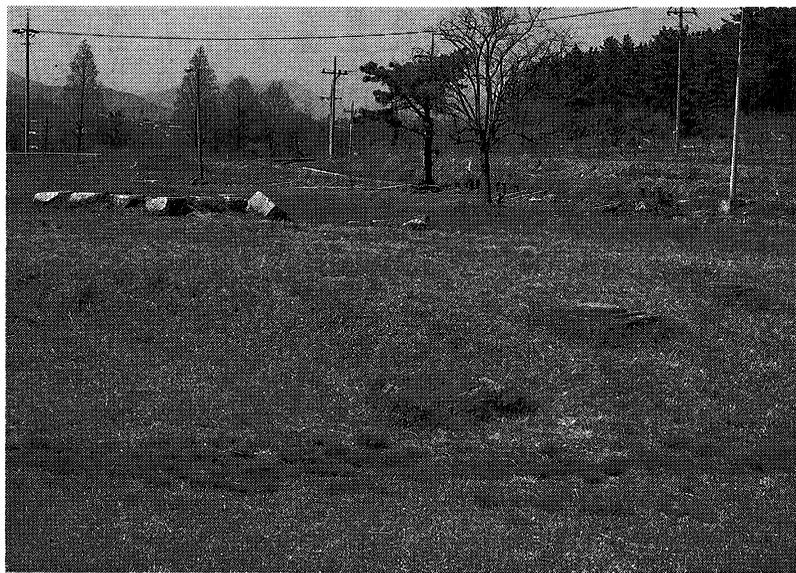


写真 3

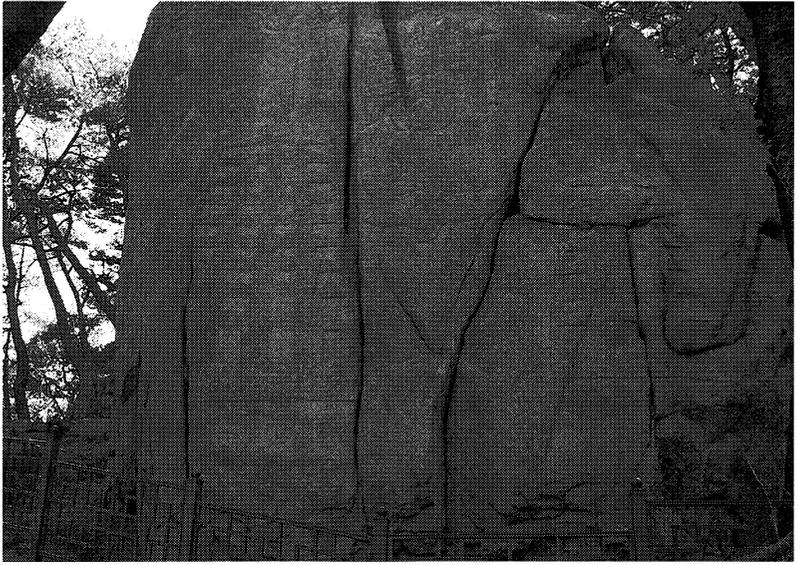


写真 4

南山から市の中心部へと戻り、皇龍寺址へ向かう。皇龍寺（ホアンリョンサ）は、新羅の護国仏教を代表する寺院である。真興王十四年（五五三）に新たな宮殿を造ろうとしたところ、黄龍が現れたために寺院として皇（黄）龍寺としたという。広大な伽藍は、高麗時代の高宗二十五年（一一三八）モンゴルの侵入を受けて焼失した。寺域は東西約二七〇メートル、南北約一一〇メートルに及ぶ。一九七九年から八年にわたって発掘調査が行われ、現在は史跡として整備されている。同寺の伽藍配置は、塔と金堂が南北の一直線上に並び、金堂の東西にも小規模な金堂を配している。そして、これらを回廊が囲むという一塔三金堂式である。金堂の基礎部分は東西五一・七メートル、南北二六・七メートルの規模がある。安置された釈迦三尊は丈六仏で、五七四年の造立。塔は九層の木造塔で、善徳女王十四年（六四五）に完成した。基礎部分は二二メートル四方の規模があり、約八〇メートルの高さであったと記録されている。礎石の大きさを

見ても、その規模がわからう（写真5、釈迦三尊の台石を撮影する長澤教授）。日本における本格的な伽藍の寺院として最古の飛鳥寺は、皇龍寺と基本的に同様の伽藍配置である。皇龍寺に遅れること三十年、その規模は比べようもない。近年、奈良の東大寺においても、記録に高さ約一〇メートルと記される七重塔の相輪部分を铸造したとみられる遺構が発見された。日本の古代仏教の展開を考える上でも、朝鮮古代仏教について深く知ることが必要だと、改めて痛感させられた。

皇龍寺の後方には、芬皇寺（フンホアンサ）がある。同寺は善徳女王三年（六三四）の創建で、三層の石塔がある。この石塔は創建時のもので、もとは九層であったと推定されている。統一新羅時代の初期に義湘と共に活躍した元暁は、朝鮮仏教史の中で最も独創的な思想家であるといわれる。芬皇寺は元暁が住した寺としても有名で、元暁研究所も設置されているという。元暁は福士氏の研究テーマで、氏の著書『新羅元暁研究』（大東出版



写真5

社)は韓国の学者からも高く評価されている。午後もだ
いぶ時間が詰まってきたため、塀越しに石塔を見学し、
海印寺のある伽耶山へと向かうことにする。五時から歓
迎カンファレンスの予定である。

慶州から高速道路を利用し、慶尚道の中心地である大
邱(テグ)を経由して伽耶山の門前町にある海印寺ホテ
ルに到着したのは、歓迎カンファレンスの受付が開始さ
れる少し前であった。カンファレンスははじまってしま
らくして、我々とは別コースで韓国入りした三輪氏が到
着したが、立正大学の諸氏をはじめ日本からの参加者は
顔が見えない。三輪氏はソウルから大邱まで高速鉄道の
KTXを利用し、そこから路線バスで来たという。

カンファレンスもお開きが近くなるが、他の顔見知り
の参加者もいないことから、一足早く宿泊所へと向かお
うということになる。今回の大会では、海印寺の山内支
院で宿泊し、食事は海印寺の食堂を利用する。受付で宿
泊所について質問したが、ソウルなどから動員された学

生らしく、なんとも要領をえない。このやり取りを見た、
福士氏知り合いの尼僧さんが、宿泊所に指定された子院
ホンジェアンまで案内してくれることになった。山内の
道路には街灯もなく真っ暗な中で、到着早々で地理に不
案内な我々だけでは、広大な山内で迷子になったこと
あろう。

宿泊所の子院に着いたところ、先に着いた韓国の先生
方が駐車場へと戻ってくる。聞けば、今日は泊まれない
といわれたので、仕方がないから門前町に行って旅館を
探すという。耳を疑うような話であるが、野宿する訳に
もいかない。福士氏が粘って交渉した結果、なんとか修
行僧の空き部屋を二室と、布団をかき集めてくれること
になった。子院の僧の話では、学会は明日からであると
連絡を受けており、宿泊の用意も明日から行うため、何
の準備もないという。とにかく旅装を解き、順次シャワー
を使うことになった。ところが、いざシャワーという時、
すぐに出るようにと三輪氏が呼びに来た。何でも日本か

らの参加者十数人が到着したという。我々だけでも大変な状況であったから、このままではどうなるか分らない。皆で相談したが、直ちに旅館を探した方が良いとの判断である。幸いに車であったから、すぐさま荷物をまとめて門前町に戻り、旅館を見つけることができた。もう午後十時過ぎであった。

四月二十二日 午前六時過ぎに旅館を出て、海印寺の食堂で朝食をいただく。数百人は入れる広さがあり、山内の僧尼ばかりでなく、参拝する信者もみな利用することができる。もちろん精進料理であり、調理するのは修行僧である。ちなみに朝の勤行は、三時三十分から四時まで大雄殿で行われる。八時からは開会式である。会場の大雄殿は山内僧尼、学会の参加者、信者で一杯であった。海印寺の長老が法語を述べられたが、特別な高僧として尊崇を受けていることが、会場の雰囲気からも伺われた。

研究発表は九時からである。発表会場は、修行僧のた

めの学校の教室や子院が充てられており、十三の部会場は山内に分散している。福士氏、三輪氏、寺尾の三名は第五部会日本仏教、望月氏は第七部会インド・チベット仏教、長澤氏は第十部会仏教文化に属し、何れも二十日の午前、或いは午後の発表である。身延山大学参加者の発表題目は、次の通りである。

第五部会日本仏教

福士慈稔 日本浄土宗諸師の元暁引用章疏にみられる若干の問題点

三輪是法 近代日本における日蓮思想の受容

寺尾英智 中世日蓮宗寺院における造像活動について

第七部会インド・チベット仏教

望月海慧 ディーパンカラシユリージュニャーナの

『法界見歌』について

第十部会仏教文化

長澤市郎 日本の木彫仏像―その制作技法と修理技

法―

第五部会は昨夜行ったホンジェアン（写真6、発表会場の建物）、第七部会は本院内の経学院、第十部会は本院の後方にある学校施設と、お互いかなり離れている。第五部会の発表者には韓国、中国の学者もいたが、何れも日本の大学に所属しており、日本語に達者な方ばかりである。そこで、発表、質疑応答共に日本語で行うことになった（英語での発表者も一名いた）。なお、他の発表者と論題は、次の通りである。

上島 享 日本中世における神仏習合の展開―真言

護持僧の活動を中心に―

前川健一 明恵をめぐる説話について

立花弥生 鎌倉のやぐらについて―多宝廃寺やぐら

群における納骨を中心に―

韓国仏教学結集大会参加・仏教道跡研修報告（寺尾）



写真6

韓国仏教学結集大会参加・仏教遺跡研修報告（寺尾）

高井恭子 初期日本黄蘗における『華嚴經』——宗旨

と經典の關係を視点にして——

陳・継東 一八七六年日本仏教の上海伝道——『南京

語説教』を中心として——

李 妍淑 明恵の末法思想と羅漢信仰

角田玲子 『歎異抄』における悪と宿業の問題

部会には、この他に明日の発表である養輪顕量氏や曾根原理氏などの参加もあり、お互いに異なる視点から有意義な議論が交わされた（写真7、上島氏の発表）。

ところで、他の日本からの参加者によると、昨夜はいささか大変であったという。大邱から海印寺門前まで学会が用意したバスを利用したが、バスが小型であったために一度では乗り切れなかった。バスが往復して戻ってくるのを待っていたため、第二便となった人たちが海印寺ホテルに到着したのは午後九時すぎとなり、それから門前町で夕食となった。その後、宿泊所であるホンジェ



写真7

アンに行ったが、前述したように満足に宿泊する準備もなかった。発表会場となった建物に、日本人を中心に十数人がほとんど雑魚寝状態であった。起床後に荷物を移動するように言われたが、それが発表会場になっていたという。なお、女性の宿泊所は、尼寺の子院であった。このようであったから、立正大学の諸氏は我々の話を聞き、早速に旅館に移る手配をしている。今回の学会では、ソウルの大学を中心に発表の受付等が行われ、会場は遠隔地の有力な寺院であったことから、事務的な打ち合わせや連絡にかなりの齟齬があったものであろう。

朝食後や昼休み、そして部会の終了後に、山内の一部を見学した。慶州の寺院と異なり、山間部にある海印寺は典型的な山寺である。哀莊王三年（八〇二）に順応と理貞の二人の僧によって創建され、高麗大藏経の版木を伝えることから法宝寺刹と位置づけられている。大藏経の出版は、宋の太宗の太平興国八年（九八三）に完成した北宋勅版大藏経に代表されるように、国家的事業とし

て行われた。高麗大藏経には、三種類ある。最初は高麗の顯宗代に刊行された、いわゆる初彫大藏経である。事業の開始は顯宗二年（一〇一一）と同十年（一〇一九）の二説がある。ついで、この大藏経に漏れた經典を補う続藏経を、義天が刊行した。しかし、初彫大藏経は、高宗十九年（一一三二）モンゴル軍の侵入によって燃やされてしまう。そこで、モンゴル軍の撃退を祈念して高宗代に刊行されたのが再彫大藏経、すなわち現存の高麗大藏経である。彫造の機関として大藏都監が江華島（カンファド）に、分司大藏都監が南海地域および江華島に置かれ、高宗二十三年（一一三六）から同三十八年（一二五一）までかかって完成した。正藏は六五五八卷、副藏は一五〇卷あり、合計で六七〇八卷におよぶ。板木は一三九八年に海印寺に移され、収蔵庫である大藏経板殿も建設された。大藏経板殿入口に掲げられた扁額にあるように八万大藏経とも呼ばれるが、これは板木が八万枚余りであることからの呼称である（写真8）。高麗大藏経

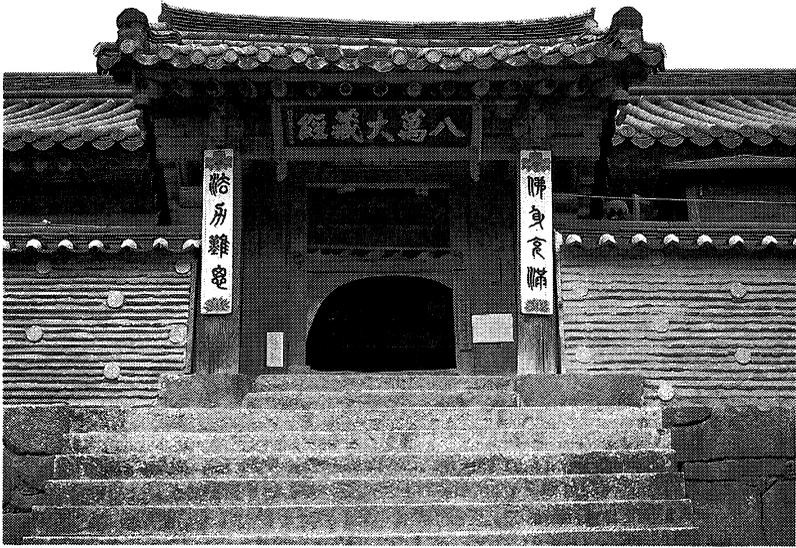


写真 8

は本文の正確さに定評があり、現在の漢文大藏經として世界的な定本となっている『大正新修大藏經』の底本にも用いられている。經本の形態は卷子本（巻物）や折本ではなく、袋綴じの大型冊子本である。立正大学図書館に新刷の一蔵が所蔵されているが、身延山大学では残念ながら写真版による洋装縮刷版を所蔵するだけである。

四月二十三日 それぞれの部会発表は昨日終了しているので、他の部会の発表を聴講し、山内の見学も行った。午後には学会主催による見学会も予定されていたが、日曜日であるため夕方には高速道路の大渋滞も予想されるということで、特にソウル方面に向かう韓国の学者達は帰途につく人も多い。そこで我々も混乱を避けるため、見学会には参加せず昼前に慶州に向かうことにする。三輪氏も、午前中の路線バスで大邱に向かうという。

慶州では、まず国立慶州博物館を見学した。考古館、雁鴨池館、特別展示館、美術館の四つの建物があり、屋

外にも石仏や石造塔などが展示されている。特に美術館には、皇龍寺址出土品など新羅仏教美術の重要な遺品が数多く展示され、二、三時間ではとても時間が足りない。手持ちの現金が少なく、図録類をほとんど購入できなかったのは残念であった(写真9、屋外展示の聖徳大王神鍾)。

博物館で時間をかけたので、先を急がねばならない。

現在発掘中の仁容寺址(イニョンサジ、統一新羅時代に創建)を堺越しに見学し、天馬寺址(チョンマサジ、同上)へと向かう。小さな集落のはずれにある畑の中に、建物の礎石や石塔の部材が露出している(写真10)。遺跡の土地は国が買い上げ、近く発掘がはじまるというが、畑にはまだ作物が栽培されていた。

暗くなる前に釜山に到着し、宿を確保した後、釜山一の繁華街南浦洞(ナンポドン)のチャガルチ市場で夕食を囲んだ。今回の旅行では、現地を知り尽くした福士氏のおかげで、宿泊費を極力抑えることができた。その中で、少し贅沢な晩餐であった。



写真9

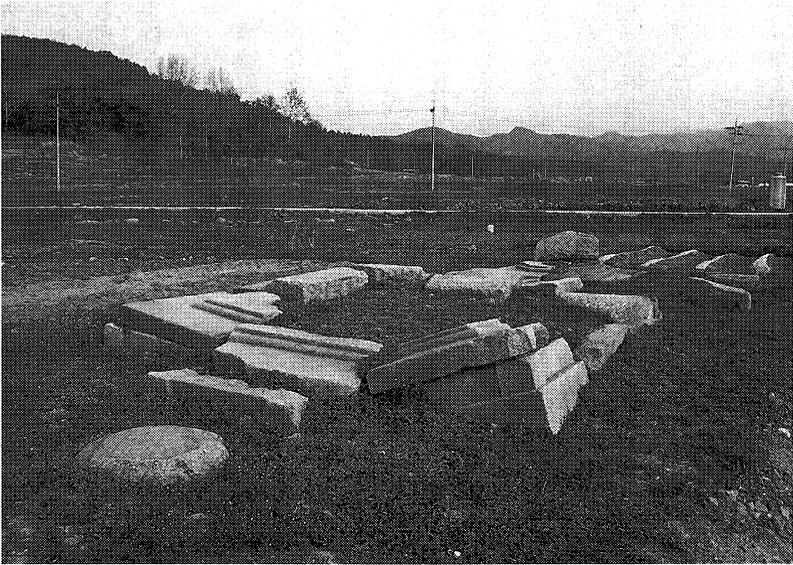


写真10

四月二十四日 午前十時四十分発の大韓航空七一一便で、釜山から成田へ。色々とハプニングもあったが、楽しく充実した旅行であった。出発前の準備、そして現地での様々な事柄の中で、諸氏には大変お世話になった。改めて感謝の意を表したい。

付記

研究発表論文については、大会組織委員会より『二〇〇六韓国仏教学結集大会論集』第三巻（全二冊、総頁一七一四頁）として印刷配布されている。